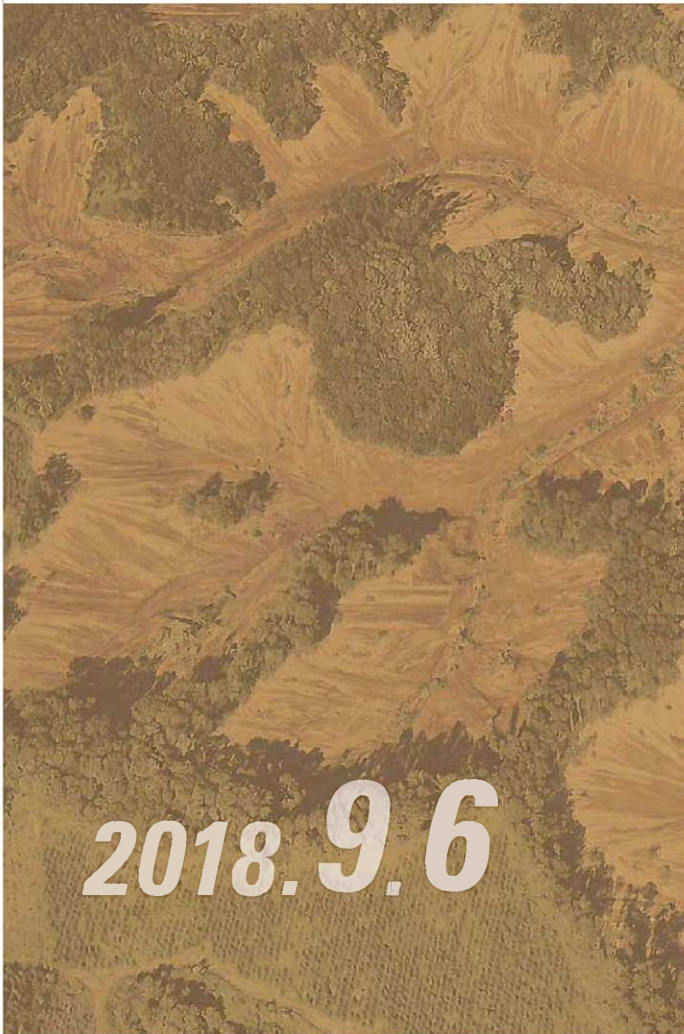




厚真町・安平町・むかわ町

平成30年北海道胆振東部地震記録誌



2018.9.6



厚真町・安平町・むかわ町

平成30年北海道胆振東部地震記録誌



発刊にあたって

平成30年9月6日3時7分に発生した平成30年北海道胆振東部地震から2年半の月日が経ちました。

胆振地方中東部を震源としたこの地震は、北海道で観測史上初めての震度7を記録し、大規模な土砂災害や家屋の倒壊などにより、多くの尊い命が失われました。

改めまして、犠牲になられた方々に哀悼の意を表しますとともに、被災されたすべての方々に心よりお見舞い申し上げます。

本地震では、全道で1万6、649名の方が避難生活を余儀なくされたほか、北海道が広範囲にわたり停電となった国内初の「ブラックアウト」が発生するなど、道内のほぼ全域が被害を受けました。特に震源地となった、私たち胆振東部三町では道路、河川、上下水道、農地などの社会基盤・産業基盤が甚大な被害を受け、暮らしや生業はもとより、心にも深刻な打撃を受けました。

そうした中で、発災直後から長きにわたり国や北海道をはじめとする関係機関や全国の自治体職員の災害対応へのご協力、全国各地から駆けつけていただいたボランティアの方々の温かい善意、そして、国内外から寄付金や支援物資など多くのご支援を賜りましたことに、改めまして心より感謝申し上げます。

現在、三町ともに復旧・復興の道半ばではありませんが、一日も早く町民が元の生活を取り戻し、安心して暮らし続けられるまちづくりを目指して取り組んでいきます。また、震災を機に生まれた新たなつながりを大切にし、さらなる発展につながる復興が実現できるよう、引き続き全国の皆様のご支援をいただきながら着実に歩みを進めてまいります。

近年、全国各地で自然災害が発生し、多くの人命や財産が失われているほか、近い将来には巨大地震、気候変動に伴う台風や集中豪雨の増加なども危惧されています。

こうした中、災害の記憶を風化させることなく教訓として次代に継承することを目的に、この地震記録誌を三町合同で制作いたしました。本書が、全国の防災・減災への取り組みの一助となれば幸いです。

令和3年3月

厚真町長 宮坂 尚市朗

安平町長 及川 秀一郎

むかわ町長 竹中 喜之

目 次

発刊にあたって 2

北海道胆振東部地震の概要

地震の概要 6

被害の概要 8

厚真町・安平町・むかわ町の被災と復興への歩み

胆振東部3町の概要 12

[3町に関わった方々]

あの時——私たちは①（3町共通関係者インタビュー）

陸上自衛隊第7師団 16 / 国土交通省北海道開発局 20 / 北海道総務部危機対策局危機対策課 24
胆振東部消防組合消防本部 28 / 日本赤十字社北海道支部 32

[厚真町]

発災後1年の歩み 38

あの時——私たちは②（厚真町関係者インタビュー）

厚真町長 56 / 胆振東部消防組合消防署厚真支署・厚真消防団 60
社会福祉法人 北海道厚真福祉会 64 / 厚真町災害ボランティアセンター 68
上厚真小学校 72 / 豊丘自治会 76 / 厚真町防災アドバイザー 80

[安平町]

発災後1年の歩み 86

あの時——私たちは③（安平町関係者インタビュー）

安平町長 104 / 復興学術支援 108 / 災害ボランティアセンター 112
復興ボランティアセンター 116 / 早来中学校 120 / 追分町内会 126
北海道警察安平駐在所 128 / 胆振東部消防組合 消防署安平支署 130

[むかわ町]

発災後1年の歩み 134

あの時——私たちは④（むかわ町関係者インタビュー）

むかわ町長 152 / 北海道鶴川高等学校野球部 156 / むかわ建設協会・消防団 160
株式会社いすゞ北海道試験場 164 / デイサービスたんぽぽ 168
一般社団法人ウエルビーデザイン 172 / につぼん恐竜協議会・姉妹都市 176

資料から見る地震の記録

厚真町 182 / 安平町 190 / むかわ町 198

国や北海道への要望活動 206

北海道新聞報道記事集 210

北海道胆振東部地震の概要

概要

北海道で初めて 震度7を記録

平成30（2018）年9月6日3時7分、北緯42度41分・東経142度00分、深さ37キロメートルで、マグニチュード（M）6・7の地震が発生し、厚真町で最大震度7、安平町、むかわ町で震度6強を観測したほか、北海道のほぼ全域で震度6弱～1を観測しました。胆振地方東部で大きな被害が生じたことから、気象庁は同日「平成30年北海道胆振東部地震」と定めています。

地震の後、震度6弱が1回、震度5弱が2回など、平成31（2019）年3月31日までに震度1以上を観測する地震が震源を含む南北約30キロメートルの範囲で344回発生しました。

震度7を観測するのは北海道で初めてのことであり、国内では平成28（2016）年熊本地震以来（観測史上6回目）となりました。

安平町（北海道新聞社提供）

■各地の震度

震度	市町村	観測地点
7	厚真町	厚真町鹿沼
	厚真町	厚真町京町*
6強	安平町	安平町早来北進* 安平町追分柏が丘*
	むかわ町	むかわ町松風* むかわ町穂別*
6弱	札幌市	札幌東区元町*
	千歳市	新千歳空港
	日高町	日高地方日高町門別*
	平取町	平取町振内*
5強	札幌市	札幌北区太平*
		札幌北区篠路*
		札幌北区新琴似*
		札幌白石区北郷*
		札幌手稲区前田*
	札幌清田区平岡*	
江別市	江別市緑町*	

震度	市町村	観測地点
5強	千歳市	千歳市北栄
		千歳市若草*
		千歳市支笏湖温泉*
	恵庭市	恵庭市京町*
	三笠市	三笠市幸町*
5弱	長沼町	長沼町中央*
	苫小牧市	苫小牧市旭町*
	平取町	平取町本町*
	新冠町	新冠町北星町*
	新ひだか町	新ひだか町静内山手町 新ひだか町静内御幸町*
5弱	石狩市	石狩市花川
		石狩市豊富 石狩市花畔*
	新篠津村	新篠津村第47線*
札幌市	札幌豊平区月寒東*	
	札幌西区琴似* 札幌厚別区もみじ台*	

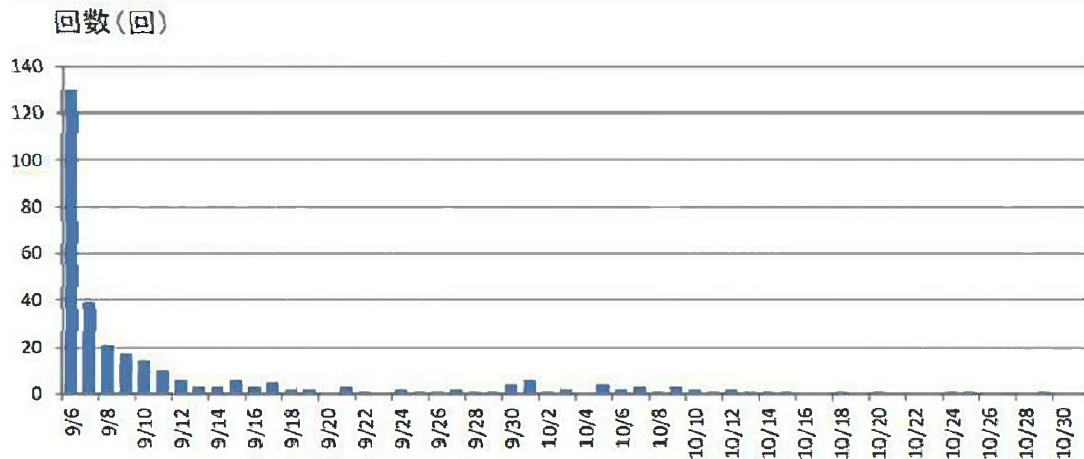
震度	市町村	観測地点
5弱	江別市	江別市高砂町
	恵庭市	恵庭市漁平
	北広島市	北広島市共栄*
	函館市	函館市新浜町*
	岩見沢市	岩見沢市栗沢町東本町*
	南幌町	南幌町栄町*
	由仁町	由仁町新光*
	栗山町	栗山町松風*
	伊達市	胆振伊達市大滝区本町*
	室蘭市	室蘭市寿町*
5弱	苫小牧市	苫小牧市末広町
	登別市	登別市桜木町*
	白老町	白老町大町 白老町緑丘*

9月6日03時07分の震度観測点。*印は地方公共団体または国立研究開発法人防災科学技術研究所の震度観測点
 出典：『災害時地震報告 平成30年北海道胆振東部地震』（平成31年2月・気象庁）

■地震概要

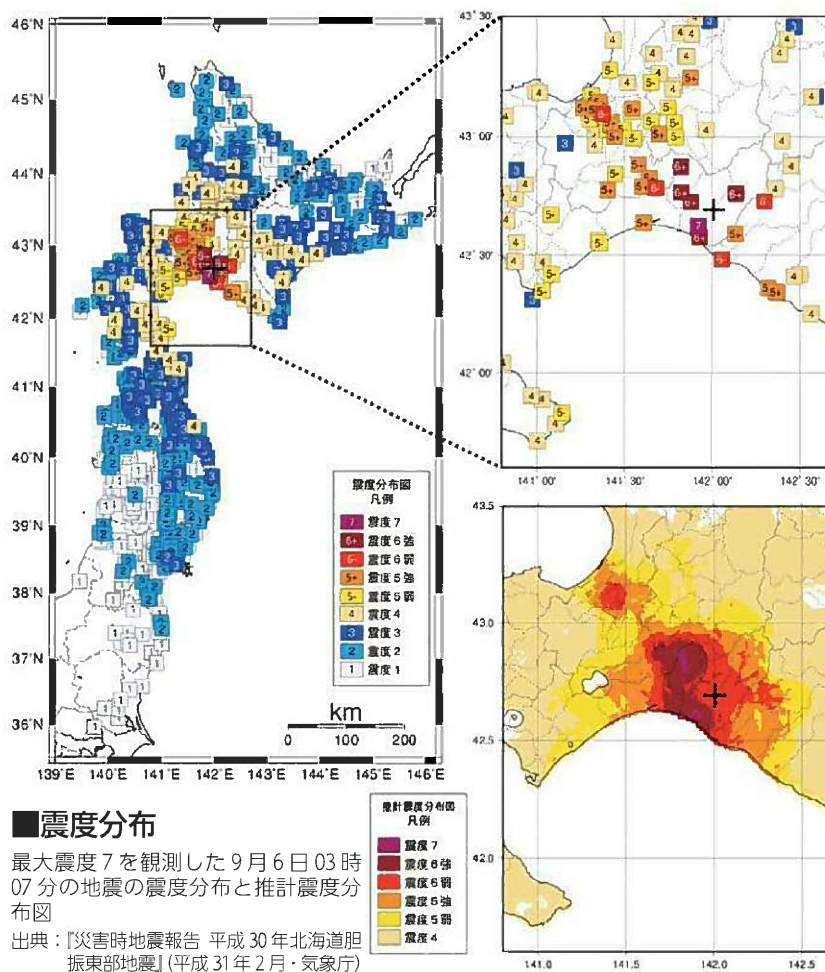
発生時刻： 2018年09月06日03時07分59.3秒
 震央地名： 胆振地方中東部
 震源の緯度・経度： 北緯42°41.4'・東経142°00.4'
 震源の深さ： 37km
 規模(マグニチュード)： 6.7
 最大震度： 震度7

「平成30年北海道胆振東部地震」の日別地震回数 (平成30年9月6日03時～10月31日24時、震度1以上の地震)



■日別地震回数

震度1以上の日別地震回数(2018年9月6日03時～10月31日24時) 出典：『災害時地震報告 平成30年北海道胆振東部地震』(平成31年2月・気象庁)



甚大な人的・建物被害 北海道全域でブラックアウト

平成30年北海道胆振東部地震の発生で、大規模な土砂災害などにより44名（災害関連死3名を含む）の尊い命が失われたほか、785名の方が負傷しました。

揺れや液状化現象などにより、住家全壊491棟、住家半壊1,816棟という甚大な被害が生じたほか、北海道のほぼ全域で停電（ブラックアウト）が生じるなど、未曾有の事態となりました。学校や公民館などの公共施設、道路や橋梁、上下水道施設などの生活基盤、農地や農業用施設などの生産基盤が受けた被害も甚大で、北海道が取りまとめた北海道および市町村の被害額の合計は1,647億6,800万円に上ります。

厚真町（北海道新聞社提供）

■人的被害の状況

被害	総数	市町村別内訳
死者	44名	札幌市3名（災害関連死2名を含む）、苫小牧市2名、 厚真町37名（災害関連死1名を含む） 、 むかわ町1名 、新ひだか町1名
重傷者	51名	栗山町1名、札幌市1名、江別市1名、北広島市1名、石狩市1名、苫小牧市9名、 安平町7名 、 むかわ町27名 、新冠町1名、帯広市1名、土幌町1名
中等傷	8名	江別市1名、日高町2名、函館市5名
軽傷者	726名	三笠市2名、芦別市1名、由仁町2名、札幌市294名、江別市3名、千歳市11名、恵庭市3名、北広島市6名、石狩市1名、室蘭市2名、苫小牧市15名、伊達市1名、 厚真町61名 、 安平町10名 、 むかわ町250名 、日高町34名、新ひだか町4名、平取町3名、函館市5名、帯広市12名、本別町1名、幕別町2名、音更町1名、厚岸町1名、猿払村1名

令和2（2020）年9月1日現在

出典：『平成30年北海道胆振東部地震による被害状況等（第122報）』（令和2年9月・北海道）



北見市大町 (北海道新聞社提供)



釧路市大通 (北海道新聞社提供)



札幌市清田区 (北海道新聞社提供)



室蘭市東町 (北海道新聞社提供)

■建物被害の状況

住家被害

被害	総数	市町村別内訳
全壊	491棟	札幌市 101棟、江別市 1棟、千歳市 1棟、北広島市 17棟、 厚真町 235棟 、 安平町 93棟 、 むかわ町 40棟 、日高町 3棟
半壊	1,816棟	由仁町 2棟、南幌町 1棟、札幌市 818棟、江別市 23棟、千歳市 1棟、北広島市 20棟、苫小牧市 5棟、登別市 1棟、 厚真町 335棟 、 安平町 366棟 、 むかわ町 186棟 、日高町 54棟、平取町 3棟、函館市 1棟
一部損壊	47,105棟	夕張市 1棟、美唄市 7棟、三笠市 25棟、深川市 1棟、由仁町 19棟、長沼町 28棟、栗山町 14棟、沼田町 1棟、南幌町 4棟、新十津川町 1棟、札幌市 36,251棟、江別市 529棟、千歳市 506棟、恵庭市 26棟、北広島市 1,078棟、石狩市 317棟、当別町 11、新篠津村 1棟、小樽市 19棟、蘭越町 1棟、岩内町 1棟、室蘭市 66棟、苫小牧市 473棟、登別市 47棟、白老町 5棟、 厚真町 1,091棟 、洞爺湖町 1棟、 安平町 2,481棟 、 むかわ町 3,260棟 、日高町 446棟、平取町 323棟、新ひだか町 57棟、函館市 10棟、森町 3棟、帯広市 1棟

非住家被害

被害	総数	市町村別内訳
全壊	1,215棟	札幌市 7棟、江別市 4棟、 厚真町 686棟 、 安平町 343棟 、 むかわ町 175棟
半壊	1,389棟	札幌市 27棟、江別市 2棟、 厚真町 669棟 、 安平町 555棟 、 むかわ町 135棟 、平取町 1棟
一部損壊	4,708棟	栗山町 2棟、札幌市 431棟、江別市 16棟、千歳市 1棟、石狩市 4棟、当別町 1棟、室蘭市 36棟、苫小牧市 19棟、登別市 5棟、 厚真町 813棟 、 安平町 2,718棟 、 むかわ町 569棟 、新ひだか町 1棟、七飯町 2棟

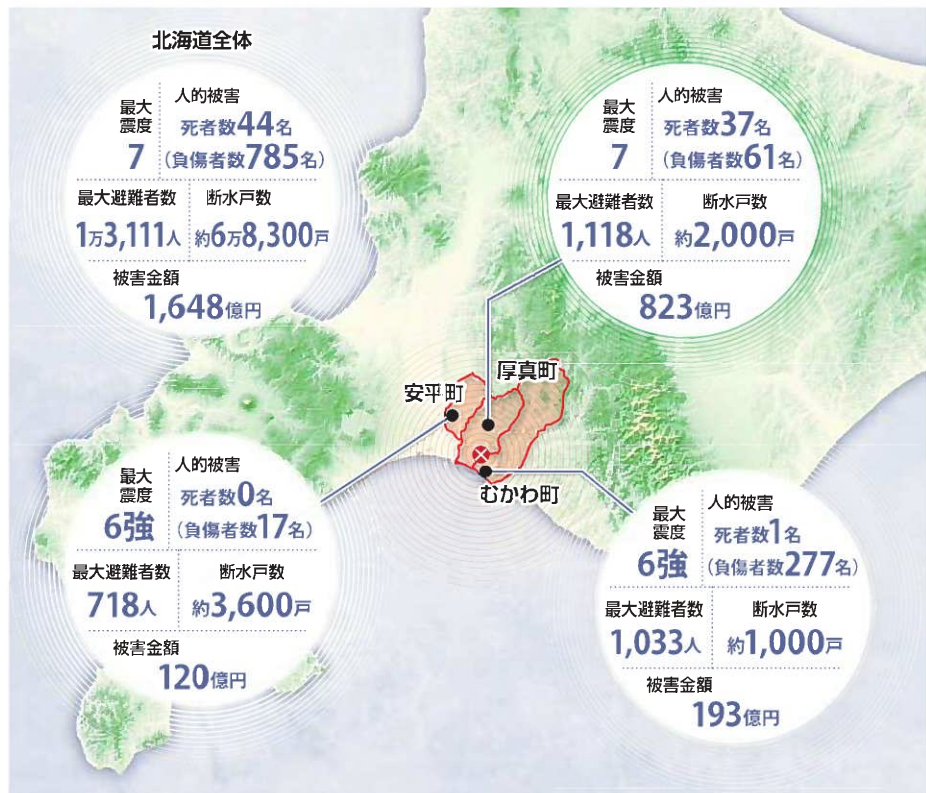
令和2(2020)年9月1日現在

出典：『平成30年北海道胆振東部地震による被害状況等(第122報)』(令和2年9月・北海道)

■避難の状況

住民避難	最大避難者数：13,111人(9月7日22時) 累計避難者数：16,649人
避難指示・勧告	避難指示(緊急)：北広島市、 厚真町 、 安平町 、 むかわ町 、日高町、平取町 避難勧告： 厚真町 、 安平町 、 むかわ町 、日高町、平取町

出典：『平成30年北海道胆振東部地震災害検証報告書』(2019年5月・平成30年北海道胆振東部地震災害検証委員会)



厚真町・安平町・むかわ町の
被災と復興への歩み

被災復興

胆振東部3町の概要

豊かな自然環境に恵まれた 厚真町・安平町・むかわ町

北海道の南西部に位置する厚真町・安平町・むかわ町は、面積の合計が約1,353km²と、東京23区の約2倍の規模を有しており、東側には日高山脈が縦走し、南側は太平洋に面するなど、豊かな自然環境に恵まれています。また、北海道の空と海の拠点である新千歳空港や苫小牧港に近く、鉄道や道路網なども充実した、交通アクセスに優れた地域です。

作付面積日本一を誇る厚真町のハスカップ、数々の名馬を生み出してきた安平町の軽種馬、地域団体商標にも登録されているむかわ町のししやもやメロンなど豊かな農水産品のほか、道内屈指のサーフスポットである浜厚真海岸、日本遺産にも認定され鉄道文化を継承する「道の駅あひらD51ステーション」、国内最大の恐竜全身骨格化石「むかわ竜」など、数々の観光資源にも恵まれています。

厚真町 (あつまちょう)

あつまるつながるまとまる

大いなる田園の町あつま



面積 404.61km²

人口 4,422人 世帯数 2,093世帯 (令和3年1月末現在)

豊かな森と海、黄金色に輝く田園が広がり、おいしい食材とエネルギー、自然環境が整った都会近郊での田舎暮らしを実現できるまち。

安平町 (あびらちょう)

育てたい暮らしたい帰りたい

みんなで未来へ駆けるまち



面積 237.16km²

人口 7,555人 世帯数 4,026世帯 (令和3年1月末現在)

平成18(2006)年に、鉄道の町として栄えた「追分町」と軽種馬の産地である「早来町」が合併して誕生した自然に囲まれたまち。

むかわ町 (むかわちょう)

人と自然が輝く清流と健康のまち



面積 711.36km²

人口 7,727人 世帯数 4,073世帯 (令和3年1月末現在)

平成18(2006)年に、海側にあった「鵜川町」と山側の「穂別町」が合併して誕生。全国でも屈指の清流度を誇る「鵜川」が南北に縦走するなど多彩な自然環境に恵まれたまち。



※地図は国土地理院地図を加工して作成しています。



3町に関わった方々

■あの時—私たちは①（3町共通関係者インタビュー）

被災地に寄り添った救助・支援活動 そしてこれから

——活動内容について教えてください。

広報担当 救助・支援活動は9月6日から10月14日の計39日間になります。10月9日時点になりますが、3町にフォーカスした活動実績を申し上げます。

警察や消防と連携した人命救助・行方不明者捜索は36名の発見、出動人員は約3万6,300名、施設機材（油圧、バケット、ドーザ）557台の提供、約6キロメートルの道路啓開、給水支援約1,100トン、給食支援約13万3,000食、入浴支援2万2,100名、そのほか、音楽演奏、輸送、衛生、自治体の臨機ニーズへの対応となります。

また、発災直後から北海道庁、厚真町、安平町、むかわ町にリエゾンオフィサーを派遣しました。リエゾンオフィサーは、各

自治体と自衛隊の連絡調整を行い、両組織をつなぐ役割を担います。

第7特科連隊は、陸上自衛隊第7師団（東千歳）隷下部隊で、警備担当区域は日高町、平取町、むかわ町、厚真町、安平町です。

——発災直後の動きについて教えてください。けまずか？

深江 地震発生当時は自宅におりました。地震が発生し、飛び起きてそのまま出勤。寝ていても飛び起きるほどの揺れで、これは間違いなく出勤がかかるだろうと思いました。部隊はすでに非常勤務態勢



深江 健也さん

陸上自衛隊第7師団第7特科連隊
当時第1特科大隊第2射撃中隊前進観測班長／厚真町派遣
（現第1特科大隊連絡幹部） 深江健也さん
当時第1特科大隊第1射撃中隊前進観測班長／安平町派遣
（現第3特科大隊第1係） 渡辺 淳さん
当時第2特科大隊第3射撃中隊前進観測班長 むかわ町派遣
（現第2特科大隊運用訓練幹部） 瀧上敦士さん

に移行しており、速やかに厚真町へ向かうように命ぜられました。

渡辺 私と同じく飛び起きて、家の中を見渡すとこれは出動がかかるなと思いい、連絡が来る前に出動すると、すぐに安平町へ行くよう命ぜられました。



渡辺 淳さん

瀧上 私も地震と同時に着替えて出勤し、直ちにむかわ町への出動を命ぜられ、そのまま出発しました。



瀧上 敦士さん

——役場までの道中はいかがでしたか？

深江 厚真町に向かうためには、安平町を



土砂崩れの現場で人命救助に当たる陸上自衛隊員（陸上自衛隊第7師団提供）

經由することになります。いつも通る道路は道道10号千歳鶴川線ですが、地震により安平町と厚真町の間が土砂でふさがれてしまいました。結果、遠回りを余儀なくさ

れ、信号もすべて消えている中で、急ぎながらも慎重に前進していったと記憶しています。午前5時半頃には役場に着きました。渡辺 いつもは信号の点いている所が点いていない。街も真っ暗で、とても違和感があったのを覚えています。土砂崩れ・地割れなどを想定していたのですが、駐屯地から安平町までは特にそういう箇所はなく、すぐに安平町役場に到着することができました。午前4時半頃に着いていたと記憶しています。

瀧上 向かっていたむかわ町役場の本庁舎は海に面しています。ただ、ニュースなどを事前に確認する時間がなく、現場がどのような状態にかまったりわからない状態でした。地震による津波の心配を念頭に置きつつ、経路上に異常がないかに気を配って前進。午前5時40分頃に到着して

たと記憶しています。

——役場に到着し、最初に何をされましたか？

深江 私が厚真町役場に着いたのは5時半頃です。最初にいつも防災担当でお世話になっている方の所に行って現在判明していることを教えてもらい、状況の把握に努めました。

瀧上 5時40分頃にはむかわ町役場に着きました。役場では職員の方が被害状況を把握するためにそれぞれ奔走している状況で、情報を収集し、それを部隊のほうに報告させていただきました。

渡辺 早く到着したということもあり、安平町役場は本当に足の踏み場もないほど物が散乱していて、自分たちの居場所をつくるために物をどかさないといけない状態でした。町職員の方が把握している状況などの情報を収集し、それを部隊に報告しました。

——厚真町での救助活動について教えてください
ただけですか？

深江 自衛隊の部隊が厚真町に投入され、

上級部隊の指揮所が立ち上がった段階で、リエゾンオフィサーとしての職務をいったん解かれて、行方不明捜索班の現場に投入されることになり、吉野地区に入りました。

道路があった所が完全に土砂で埋まっていたり、住宅が形を崩しながら流されていたりという状況で、「生死を分けるタイムリミットの72時間」というものがあります。一刻も早く見つけ出すため、9月7日の朝から行方不明者全員を救助した9月9日22時48分まで全力で捜索活動に当たりました。

—— 緊急対応から生活支援に移りますが、どのような活動をされましたか？

瀧上 給水、給食、入浴に、それぞれ支援部隊が入っていましたから、自衛隊とむかわ町役場との連絡調整役として細かいニーズに応えられるように話をうかがい、さらに困っていることはないかと自分で色々と現場を回る形で活動し、要望の具現化に向けた調整をしました。

深江 生活支援に活動の重点が移行してからは、私も同じように自治体の方々のニーズを把握して、部隊と調整する役割に回

ておりました。

渡辺 安平町で保有する救援物資を避難所へ送り届ける手段がないということでしたので、自衛隊車両で運んだり、土砂でふさがった道路を開けるための重機に燃料がほしいという要望があったので、その旨を部隊に伝えました。また、町の広報車が足りないということ、車の手配の連絡なども私の役割でした。

瀧上 一人では入浴できない高齢女性の方のために、時間を分けて入浴できるように、部隊の女性隊員と協力しながら調整したことを覚えております。

渡辺 給水所には住民の皆さんが水を取りに来られておりましたが、自動車などの移動手段のない方々は取りに来るのが難しい。そこで安平町役場の担当者と話をして、移動給水を実施しました。

—— 自衛隊が撤収するまで町に在勤されたそうですが、在任期間にはどのような思い出がありますか？

渡辺 大変な時なのに、皆さんがとても協



避難所前での慰問演奏の様子（陸上自衛隊第7師団提供）

力的に支援して下さったことは印象に残っています。物を運んでいることに気づくと、手伝いに来てくれる。大変な中でも思いやりを大事にしていらっしゃると思います。逆に元気をいただき、安平町が大好きになりました。

深江 おそらくボランティアの方だと思いますが、仮設トイレを毎日ぴかぴかに磨いている方がいらっしゃいました。当然、私たちも色々なところには配慮をしています。そうした細やかなところを配慮されている姿を見て、身の引き締まる思いがしました。

瀧上 被災者の方々が不自由を強いられる生活の中、給食と入浴支援により笑顔になってくださったことは嬉しく感じました。皆さんに寄り添った支援を行うことが大事にし、少しでも役に立てたことが実感できて、温かい気持ちになりました。

—— 激甚災害の経験から、今後必要だと思
うことを教えてください。

深江 幸い、町との協定を見直しする職務に就いておりますので、見直しを通じてより迅速で効果的な災害救助に当たるように

したいと思っています。例えば災害時に自衛隊が集結する場所は現在は1カ所ですが、地震や水害など、災害の規模や種類によって変えていかなければならないことがわかりました。そうしたところも見直していきたいと考えています。

渡辺 私たち自衛隊には担当の町があります。担当の自治体と我々自衛隊との日頃の連携の大切さをこの地震で感じました。そして、物の準備です。こういう物を持っていったら、すぐにこういう支援ができるということがありましたので、日頃からの準備や訓練が必要だと強く思いました。瀧上 私も、町の担当者との顔つなぎは大切なことだと思います。むかわ町の職員とは個人的に面識のない状態で支援をさせていただいたんですが、平素からそのような体制が整っていたならば、より良い支援ができていたのでは

ないかと強く感じましたので、翌年度からは、上司だけでなく直接現場に行く隊員も顔合わせをするよう取り組んでいます。



入浴支援を行う陸上自衛隊員と被災者〔陸上自衛隊第7師団提供〕

大規模な河道閉塞が発生 融雪期までに緊急対策工を完了

当時 国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部
厚真川水系砂防事業所調査設計班長
(現 札幌開発建設部 千歳川河川事務所計画課課長) 山口昌志さん

——9月6日、地震発生直後からどのような対応をしましたか？

当時、私は札幌開発建設部に配属されていました。地震直後、すぐに非常参集



山口 昌志さん

して登庁し、終日、鶴川・沙流川の河川の被災状況調査をしました。むかわ町の市街には多数の家屋損壊があり、被害の大きさは一目瞭然でした。翌9月7日は、厚真町、安平町、むかわ町の広範囲にわたって発生した土砂災害を北海道開発局所有の防災ヘリコプターから調査し、9月8日は、厚真川水系日高幌内川で確認された大規模な河道閉塞について、ヘリコプターからレーザー距離計を用いて形状を計測するなどの調査をしました。それ以降は、日高幌内川

に衛星通信カメラなどの遠隔監視装置を設置するために連日、現地で作業をしました。

——河道閉塞とはどのような現象ですか？

山腹崩壊した土砂によって河川がふさがれる現象です。河道が閉塞しているため水が流れず、満水になって溢れると決壊して土石流が発生し、下流に被害を及ぼす恐れがあります。日高幌内川の河道閉塞は河川が約1・1キロメートルにわたって土砂で閉塞し、その高さは低い所でも約50メートルと大規模なもので、土石流が発生すると厚真市街地まで影響を及ぼす恐れがありました。

——緊急砂防事業はどのような流れで着手に至りましたか？

9月25日に北海道知事から国土交通大臣

へ国直轄による対策について緊急要請がなされ、10月1日に日高幌内川の直轄砂防事業が決定。翌10月2日には拠点となる「厚真川水系土砂災害復旧事業所（平成31年4月から厚真川水系砂防事業所に改称）」が発足しました。11月1日には、土砂災害の規模が大きかった同じ厚真川水系支川のチケツペ川、チカエツ川、東和川も直轄砂防事業の対象となり、厚真町の計4カ所において緊急的な砂防事業に着手しました。

——日高幌内川の緊急対策において、どのような点が困難でしたか？

春の融雪水によって満水になる恐れがあったため、融雪期までに完了させる必要があり、一番の課題は「時間との戦い」でした。対策工のおもな内訳は、河道閉塞土



河道閉塞が発生した日高幌内川(平成30年9月8日撮影)(国土交通省北海道開発局提供)



緊急対策工の完成状況(平成31年4月9日撮影)(国土交通省北海道開発局提供)

砂の掘削、コンクリート製水路や砂防堰堤2基の整備。通常は「地形測量↓地質調査↓設計↓施工」という順序ですが、時間がない中での緊急対策のため、まずは工事に着手し、24時間体制で施工しながら、並行して調査設計を行いました。途中で調査結果と照合して設計を修正し、工事に反映させるなど、進め方も緊急的で難しかったです。

また、地域の方との信頼関係なくして事

業を円滑に進めることはできません。地域のご理解を得るために、厚真町の協力のもと、事業説明会を迅速に開催することができました。多くの機関の事業と関係するため、事業間調整の協議も連日連夜にわたり行いました。

厚真町をはじめとした関係各機関、地域の方々のご協力のもと、調査設計や工事の受注者が一丸となって事業を進められたおかげで、3月26日に完成することができま

した。

——現在の事業内容は？

緊急対策工は応急的な施設なので、恒久的な施設とする必要があります。令和2年度からは、緊急対策工を補強して恒久対策化する工事を行っており、令和5(2023)年度の完成を目指して鋭意進めています。

——この2年間の感想を聞かせてください。

地震の被災地における事業であり、緊張感そして使命感を持って取り組みました。事業所では「被災地の復興の礎となる復旧、そして被災された方の滞りのない生活再建」ということをつねに胸に刻みながら、相手の立場に立って事業を進めるよう努めています。時間との戦いでしたが、「やると決めた以上、何としましてもやり遂げる」を合言葉に一丸となって取り組みました。地域の方には多大なるご協力をいただき、大変感謝しております。この事業を通して多くのことを学ばせていただき、忘れられないものとなりました。地域のために、今後も様々な形で微力ながら尽力できればと思っています。

農業を支えるかんがい排水事業に 壊滅的打撃 翌春までに水利機能を回復

当時国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部
胆振東部農業開発事業所長
胆振農業事務所長
(現胆振農業事務所長) 小野尚二さん

——胆振農業事務所について教えてください。

当時は農業用排水施設の整備を行う「国営かんがい排水事業」を実施する胆



小野 尚二さん

振東部農業開発事業所という組織でした。地震による災害復旧事業をはじめ、農業生産基盤の整備をよりいっそう推進するため、令和2(2020)年4月1日から胆振農業事務所に改称し、体制を強化しました。おもに厚真町、安平町、むかわ町、洞爺湖町、豊浦町で事業を実施しています。事務所では、農業生産の基盤となるダムや河川から取水するための頭首工、用排水機場、用排水路などの農業用施設の整備を

行っています。当時の職員数は14名でしたが、事務所となった現在は32名です。

——地震でかんがい事業も大きな被害を受けたのですね。

はい、壊滅的な被害を受けました。厚真町では厚幌ダムによる農業用水の確保、用水施設の統廃合による用水管理の合理化を目的とした施設整備を平成13(2001)年から進めていました。この事業は平成31(2019)年度に完了する予定で、平成30(2018)年5月に厚幌導水路を試験通水したばかりでした。進捗率は約95%、ほぼ完了した状態。農家さんからは「世の中が変わったくらい便利になった」という感想をいただき、事業への期待を強く感じ

ていたところに地震が起こり、非常にショックを受けました。

被害は、厚真ダムについては、のり面崩落。パイプラインについては、軟弱地盤で液状化などの地盤被害が起きたほか、継ぎ手の部分が外れたり、パイプがぶつかって割れたり、亀裂が入ったりする被害が出ました。

被害状況の調査は膨大で大変でした。パイプに地下水や土砂が入っていると、それらを取り除かなければなりません。管内調査計画を作成して計画的に進める必要がありますが、各所で通行止めが発生し、現場に行くことも大変です。うちの事務所だけでは全部を調査できませんから、全道から20名ほどの職員を派遣してもらい、調査に

当たりました。

——壊滅的な被害があったということですが、翌年の農業用水はどうになりましたか？

新しい施設が完成したら撤去する予定の古い施設がありました。こうした施設を使って、水利組合ごとに、どこから水を取って農地にどう供給するとよいかを考えました。古い施設も被災していますから、使用の可否を調査して、使えるものは補修し、農家さんと打ち合わせしながら、作付けの始まる翌年4月末までに整備しました。水量の制約がありましたので、農家さんにも節水の協力をお願いします。どこをどのように進めるのか、何をすればいいのか、決めることが難しかったです。

——施設が復旧するのはいつ頃でしょうか？

むかわ町の新鶴川地区は令和2（2020）年度で終わる予定です。安平町の早来地区については、ダムの試験たん水による安全の確認が令和3（2021）年度にずれ込むと思いますが、厚真町の事業以外

は、ほとんど令和2（2020）年度で終わります。厚真町の災害復旧事業は令和5（2023）年度に完了する予定です。地震でおおよそ5年、事業工期が延びました。

——教訓を含めて今回の地震について感想をお願いします。

まず防災訓練は有効である、ということがあります。また、私は平成28（2016）年の北海道豪

雨災害の対応を担当していたことがあり、今回、その知見や経験がフルに活かされたと思っていますが、事前にどのような備えをしておくかということとはもとより、日頃、例えば土木技術であったり、制度であったり、そういうものをいかに理解しているか、基本を

どこまでわかっているか、そうしたことが災害時の応用として非常に重要だと思います。

そして、人間関係。いろんな人に助けてもらったと思いますので、日頃から人間関係を構築しておくことが大事です。さらに、地域をしっかりと見る姿勢。これらが大切だと思いました。



管離脱被災した厚幌導水路の復旧作業〔国土交通省北海道開発局提供〕

現場の情報を集め

指揮室を中心に関係者と調整

経験を活かし、次の「まさか」に備えます

北海道総務部危機対策局危機対策課

当時 応援受援班長(現 危機対策課課長補佐)

当時 厚真町リエゾン(現 危機対策課危機対策企画幹)

当時 安平町・むかわ町リエゾン・厚真町避難所運営

(現 危機対策課危機対策調整員)

当時 消防応援活動調整本部・応援受援班・安平町避難所運営

(現 危機対策課係長)

当時 救出救助班・り災証明に係る調査報告業務・厚真町避難所運営

(現 消防学校講師)

平野宏和さん

小沼敏孝さん

上段貞一さん

菅井大介さん

渡部 将さん

——北海道の支援として支援物資と応援職員
員の派遣は大きなものでした。平野さん
んがご担当されたそうですが。

平野 応援受援班で
物資の輸送や人的派遣
などに携わっていて、
北海道庁内に設



平野 宏和さん

置された危機管理センターの指揮室での勤務が8割以上でした。

最初の仕事は、災害救助法の適用に向けた内閣府との調整です。適用されなければ費用は市町村負担になりますが、被災3町以外に各地で被害が出ていて、北海道全域での停電という状況もあり、全市町村に対して災害救助法の適用を、ということ調

整し、発災したその日の午後3時頃、適用となりました。

その後、食料の調達を行いました。最初はどれくらいの人が避難しているかなど被災地の状況がなかなか見えず、まずは国の農政事務所と協議して1万食を手配することにしました。

2、3日後には、被災地と連絡を取りながら国などからの支援を受けるようになりますが、必要な物資などのニーズの把握は、情報が役場から直接入るほか、振興局経由、現地に派遣したりエゾン経由など、複数のルートがありました。そのため依頼が重複して、例えば必要なのは1本の鉛筆だったのに、現地には3本も4本も届くと

いうようなことが起こりました。物資だけでなく、情報が錯綜した状況が続きました。しかし、これはやむを得ない部分もあると思います。まずは物資を充足させることが大切です。一つひとつの依頼について、細かく確認できる状況でもありませんでした。

人の派遣の面では、避難所運営のほかに、り災証明、つまり被害状況を調査するマンパワーが足りないということがあったので、約3カ月にわたって道内市町村のほか東北などからもたくさんの方が協力に来ていただきました。他県の方たちは新潟県の中越地震などの経験からり災証明のノウハウを持っていましたし、大学の先生な

ど、色々な専門家の方に力を貸していただき、ありがたく思いました。

被災自治体に入り、現地で支援された立場としてはどうだったでしょうか？

小沼 発災した日は4時少し前に指揮室に到着し、自衛隊のリエゾンと災害派遣



小沼 敏孝さん

の調整等をしていたところ、7時頃に上司から、被害が大きいとの情報が入った厚真町への派遣を指示されました。行政職員と2名で丘珠空港に向かい、海上保安庁のヘリの準備を待って9時頃に空港を飛び立ち、現地に着いたのは10時頃です。

まず任務分担をして、行政職員は町のニーズに基づく指揮室との調整を、私は救出救助に関する情報収集・調整をすることにしました。

自衛隊の救出救助にあたり、道路の啓開が必要だったのですが、重機が不足している状況でした。同じ厚真町役場内に道道を管理する胆振総合振興局建設管理部の職員がいたので、救助現場に重機を手配し、自衛隊の指示で道路を啓開するように調整を

行いました。

行方不明者が見つかるまではおもに自衛隊との調整を行い、その後9月いっぱいリエゾンとして厚真町のニーズを北海道庁の指揮室に伝えたり、毎日開催されていた避難所運営会議に参加して避難所の声を把握し、必要としている事項について調整するなどしました。

上段 北海道では自衛隊OBを危機対策

支援員として配置しているのですが、最



上段 貞二さん

初は、各役場にリエゾンとして派遣されていた支援員との連絡調整をしました。

その後、1週間あまりむかわ町へ北海道のリエゾンとして派遣され、その次は安平町で同じくリエゾンとして活動し、少し期間が空いて厚真町の避難所の支援職員として派遣されました。

私がむかわ町に行った時には「1日も休んでいない」という町職員の方がいらっしやいました。発災当初から対応している方たちに休養していただくことも北海道から職員を派遣する目的でしたが、北海道としても職員を集めて派遣することに慣れて

いなかった部分があり、現場からのニーズにすぐには応えられず、対応が遅くなったこともあったと記憶しています。これについてはその後、北海道の人事局で派遣の仕組みの改善が進められていると聞いています。



発災後の北海道対策本部指揮室の様子 [北海道提供]

——菅井さんが携わられた消防応援活動調整本部の業務、その後の人的派遣について教えてください。

菅井 現場で活動する消防機関との調整をする役割です。地震の規模から道内のほか他県からの応援が必要になるものと判断し、札幌市、苫小牧市と連絡を取り合い、それぞれの消防には厚真町に入って調整いただきました。



菅井 大介さん

速やかに全国から応援を呼ばなければいけないので、北海道は国に連絡を取り、他県からの応援を要請し、発災当日の11時からには仙台からへりが到着していました。最後の行方不明者の方が見つかる9月10日までの間、私は消防の活動の調整を行っていました。

その後、12月まで平野班長のもとで応援受援班の職員派遣の窓口として、国や他県、現地、庁内との調整がメインでした。

悩ましかったのは避難所の避難者数が減っていくのに対して、避難所運営の適正人員をどう判断したらよいかということでした。今まで5名だった運営要員が、いきな

り2名に減るといいうのでは運営管理に支障が生じますから、その調整や判断に苦労しました。

もう一つは、上段調査員からもありましたように、北海道庁からの派遣は役場の方に本来業務や休養をしていただくという従事者支援の面もあり、避難所の体制は、北海道からの派遣職員を中心に運営を行う方針のもとで要員を配置しましたが、避難者の方にしてみれば地元の役場の方がいると、土地勘もあるし安心だという面もあります。町の判断で、町職員を複数人、避難所に配置するケースもありました。

——渡部さんは、救出救助班、その後、り災証明の業務にも当たられていますね。



渡部 将さん

渡部 救出救助班では、行方不明者、怪我人、孤立している場所などの情報を収集して、初期段階で道路がすべて流されているという情報が入っていたので、ヘリコプター等運用調整班と合同で、北海道のほか、警察、札幌消防、海保、陸自、空自など関係機関が集まり、指揮室の同じ

テーブルで入ってきた情報を基に活動の方針を立てました。

私は平成28(2016)年に起きた上川や十勝地方を中心とした水害の時も、今回と同じ救出救助班でした。当時経験したのは、役場や災害対策本部には孤立している人数や場所など細かな情報がなかなか入らないのですが、警察、自衛隊、海保、消防などにはそれぞれに情報が入っていて、それらの関係機関が集まることで必要な情報を集約できるということでした。関係機関で得た情報が集まれば状況把握はある程度できるという経験をしたことで、胆振東部地震の時には指揮室に關係機関が持ち寄る情報を集めることができました。

9月10日の朝2時頃だったと思います。最後の行方不明者の方を搬送したとの情報を受けて、初期の応急対応が終わり、救出救助が終了しました。

その後は、り災証明業務に増援で入りました。対応したのは4名で、り災証明だけに特化した班です。各市町村から情報を取って集計し、内閣府に週2回報告するのですが、慣れないものですから再確認が必要になることも多く、11月末頃まで指揮室

に結めて対応していました。

この業務の後、3日間ですが、厚真町の避難所の運営支援に入り、避難所の閉鎖にも立ち会うという、なかなか経験できない仕事もさせてもらいました。

——最後に、今後に向けての取り組みを教えてください。

菅井 北海道自体も助けられたように、他県からの応援は心強いものでした。今後も他県との連携など、災害時に役立つような人的ネットワークをつくっていききたいと思っています。

渡部 私は、今は消防学校講師として道内の消防職員の教育訓練を行っています。ここでの教育として、胆振東部地震で経験したことをふまえて、災害があったら必ず被災者がいて、その被災者には家族がいて、救助に入る自分にも家族がいるということ、救助に入れた活動をするように、消防職員または消防団員に伝えていきたいと思っています。

小沼 私は訓練を担当していますが、やはり防災力を向上させるためには訓練が大切ですので、引き続き貢献できるようにした

と思っています。

上段 市町村の防災訓練には、計画の段階から運営まで道職員が応援支援を行っています。市町村には、住民・職員の方を含めて実際に災害が起きた時に活かせるように、防災訓練を継続して行っていただきたいと思っています。

平野 正直に言って、今ならできるだけど



北海道災害対策本部の会議 [北海道提供]



災害時のみに使用される北海道庁危機管理センターで当手を振り返る5人

も胆振東部地震の時にはできなかったということも色々あります。その経験を活かして、検証委員会では今後の動きに反映することを目的に課題や改善点などについて議論・検証を行っています。我々としても同じようなことが起きた場合には、よりの確に動けるように取り組んでいきたいと思っています。

全国力を借りながらの救助活動

胆振東部消防組合

当時 消防署長兼 消防本部防災課長
(現 消防本部消防長)

当時 消防本部防災課長補佐
(現 消防署長兼 消防本部防災課長)

松永忠昭さん

稲葉博徳さん

——胆振東部消防組合の組織と役割を教えてください。

松永 胆振東部消防組合は、安平町、厚真町、むかわ町の3町で構成し、厚真町



松永 忠昭さん

には消防本部と厚真支署、上厚真分遣所、安平町には安平支署と追分出張所、むかわ町には鶴川支署および穂別支署があります。その中で本部は、全体計画や総務、許可事務などを取り扱っています。

——震災当時の胆振東部消防組合の動きを教えてくださいませんか？

松永 私が本部に到着したのは午前3時25分です。まだ暗かったので全容はわかりま

せんでしたが、道路の亀裂や液状化により大変なことが起きているのは伝わりました。胆振東部消防組合消防本部は厚真支署の2階に事務所を置いています。散乱がひどいため、1階で指揮を執ることにしました。初めは状況がつかめない中で、連絡が入ってくると対応するという状況だったと思います。

午前3時42分に厚真消防団から「吉野地区が大変な状況になっている」と連絡を受けて、タンク車を出動させました。しばらくして「土砂崩れで朝日地区から進むことができない」「その先でも土砂崩れで人が生き埋めになっているが、通行できない」と無線が入りました。時間をかけて道を探しましたが、どうしても到達できないと



胆振東部消防組合消防署 (胆振東部消防組合提供)

なった時、同じく家屋が倒壊し生き埋めが発生しているとの連絡のあった美里地区にシフトしました。吉野地区には自衛隊と消防のヘリコプターが入り、救出に当たっています。このほか、木炭小屋で発生した火災の現場へ消防職員を派遣するなどの対応も取りました。

午前4時55分に苫小牧市消防本部から「状況が深刻なようだが、応援は必要ないか」との連絡がありました。北海道内の消防は相互に広域応援協定を結んでいます。すでに町の災害対策本部から「できるだけ消防力を集めてほしい」との指示を受けており、すぐに広域応援要請を行いました。消防にはさらに、都道府県をまたいで応援に駆けつける緊急消防援助隊という仕組みがあります。地震と同時に北海道が消防庁長官を通して、おもに同じブロックである東北各県の消防に出勤を要請していました。全体の状況がわかり始めたのは発災後1時間ほどです。5時までには、人的被害は少ないと安平支署と鶴川支署から連絡がありました。消防本部から距離的に遠いむかわ町の穂別地区の状況はなかなか把握できませんでしたが、各支署に詰めている本部職員

には「地域の詳細を把握し、来られるなら本部に来てほしい」と指示を出しています。

稲葉 発災時、私はむかわ町の自宅にいました。巨人の手のひらの上で揺さぶられて



稲葉 博徳さん

かと思えるような大変な揺れでした。「間違いなく津波が来る」と思いすぐにラジオをつけましたが、津波の心配がないことを知り、自宅内と隣近所の安否を確認して、15分後くらいに鶴川支署へ向かいました。途中、近所で納屋などがつぶれているのを見て「大変なことになっている」と思いましたが、支署に着くと上司の松永と連絡が取れ、「来られるなら来てほしい」と指示され本部へ向かいました。途中で部下から電話があつて「松永署長が広域応援要請をかけた」と聞き、「いったいどういう状況になっているんだろう」と思いながら本部に到着したのは午前6時頃でした。

—— 応援の消防隊が到着したのは何時頃でしょうか？

松永 最初の広域応援隊として苫小牧市消防署の4隊が到着したのは午前6時22分

です。実はこの少し前、午前6時17分に札幌市消防局の防災ヘリコプターが厚真町のかしわ公園野球場に着陸しています。札幌市消防局の本隊が到着したのは午前11時23分ですが、この間にも胆振や日高地区などから広域応援の部隊が次々と到着しています。本州からの緊急消防援助隊としては、午前11時13分に仙台市消防局の指揮隊がヘリコプターで到着しました。厚真支署の1階には、広域応援隊と緊急消防援助隊の指揮所が設けられ、我々と連携を取りながら対応に当たりました。

緊急消防援助隊の本隊が翌日にフェリーで到着する予定でしたので、部隊の宿営場所を確保する必要がありました。めばしい場所はすでに自衛隊が展開していたり、地に亀裂が見られたりと、確保に苦慮していましたが、北海道の災害対策本部に依頼し、北海道教育委員会を通して厚真高校を借りることができました。

—— 応援部隊が到着し、態勢が整ったあとの活動について教えてください。

松永 すべての組織は、町の災害対策本部の指示により活動します。町の災害対策本



1次派遣隊が一堂に会しての緊急ミーティング(胆振東部消防組合提供)

部に、我々、広域応援隊、緊急消防援助隊がそろった時点で、それぞれの活動地区を決めていきました。胆振東部消防組合は10、15名の活動隊を1隊、さらに比較的被害の少なかった安平支署からも1隊を現場

に派遣しています。また厚真消防団も24時間の捜索活動に当たることになりましたから、ここにも数名の職員を配置しました。このほか、応援隊のナビゲーター、余震が起きた時の避難誘導、給水作業、夜間巡回などにも職員を配置しました。

——救出作業はどのように行われましたか？

松永 現場には我々のほか、自衛隊や警察も入っています。まず重機で掘り進み、何か出てきたら止めて、スコップで土を取り除き、土だけになったらまた重機で掘る。これを3、4時間間隔で交代しながら、自衛隊、警察と共に作業を続けました。消防も重機は持っていますが、崩れた土砂の量はとても消防の車両で対応できるものではありません。自衛隊の重機をおもに使いました。最後の行方不明者は6メートルも下に埋まっていたので、手掘りではとても到達できなかつたでしょう。

稲葉 この方の発見は9月9日の午後11時20分ですが、最終的に救出できたのは深夜2時過ぎでした。

松永 身体の一部でも見えたら「発見」と

なりますが、初期段階では伝わっていくうちに「救出」となり、救急車が出動しても現場で何時間も待つことがありました。そこで入ってきた情報を再度確認して、裏が取れてから救急車を出動させるようにしました。

——探索作業の間、お二人も本部に詰めて対応に当たられていたのですか？

松永 最後の行方不明者が見つかるまでの6日間、本部の職員は誰も家に帰っていません。厚真支署の職員は車庫に簡易ベッドを設置して仮眠していましたが、休養は取れていないと思います。私もアドレナリンが出ていたのか、疲れを感じないというか、疲れを感じる暇がなかつたと言えます。稲葉 行方不明者が早く発見されてほしいという気持ちでいっぱいでした。地震が発生した日からまったく家に帰っていないので、停電で携帯電話が使えなくなつた時は「自宅はどうなっているだろうか」という心配もありました。

——通常業務に戻られたのはいつ頃ですか？

松永 道南地区(胆振・日高地区)の広域

応援隊が、胆振東部消防組合や厚真支署が通常業務に戻るまで残留してくれました。厚真町では余震が続いていたので、地形の亀裂、住宅や防火対象施設の確認作業を続けました。私は防災課長を兼務していたので、石油備蓄基地などの危険物施設の被害状況確認も実施していました。通常業務に戻ったのは、広域応援隊が引き上げた10月21日です。

—— 発災から2年が経ちましたが、今振り返っていかがでしょうか？

松永 私たちは北海道南西沖地震や有珠山噴火、東日本大震災でも出動しています。受け入れ側となるのは初めてのことでしたので、「やらなくてはならないことがこんなに多いのか」と驚きました。広域応援隊や緊急消防援助隊の受け入れが大変でした。最初は受け入れ場所を確保すればよいと考えていましたが、それ以外にもヘリコプターが発着できる場所を多数確保しなければならぬなど、短時間で行わなければならないことがたくさんありました。

最近の消防車両はサーチライトで遠くを照らすことができますが、土砂災害の捜索

現場まで行くことができなかったので、移動式投光器を多数用意しておくべきだったと痛感しました。

事前の計画で、災害時には消防組合の中で助け合うことを想定しています。今回3町全部が被災したことで想定が根底から覆され、初動からただ流れに任せるだけになってしまった。3町全体が被災することを想定した計画が必要だということを実感しました。

一方、発災当日の夕方4時半ぐらいまでに行方不明者を把握できました。厚真支署では家族構成などを記載した独自の住宅地図を作っていたし、毎年、一般査察として住宅訪問も行っており、地域との結びつきの強さが早期の把握につながったと思います。

稲葉 「災害は忘れた頃にやってくる」という言葉が



救助作業への出動に備えて待機する1次派遣隊(胆振東部消防組合提供)



昼夜を問わず続けられた捜索作業(胆振東部消防組合提供)

ありますが、「忘れる前にやって来る」と言っても過言ではありません。いつ何があっても避難できる心構え、こういうことが起こったら、こういうことをするんだという準備、それが大切だと改めて思いました。

松永 個人的に印象に残っていることは、緊急応援隊が宿舎として利用していた厚真高校の教室の黒板に、「けっぴれ厚真高校」「地元を守りに帰ります」などの温かい言葉を残してくれたことです。消防仲間のつながりっていいなと思いました。

他の災害医療チームと連携しながら被災地のケアに

日本赤十字社北海道支部
当時事務局長 大崎政仁さん
事業推進課長 平尾 孔さん

——発災後に取られた初動を教えてください。

平尾 災害救護を使命としている日本赤十字社（以下、日赤）では、24時間い



平尾 孔さん

つでも対応できるように、災害が起きた時にどの職員が何をするかをあらかじめ定めた「初動マニュアル」を作成しています。発災直後には緊急電話連絡網で連絡を取り合い、まずこの北海道支部（札幌市中央区／以下、道支部）に職員が参集することになっていきます。今回の地震では、9月6日午前3時28分に最初の職員が到着して、情報収集を開始。順次、職員が到着しました。そして午前4時20分に、道支部内に

「支部災害救護実施対策本部」を立ち上げました。道内10カ所の赤十字病院および、北海道と同じ第1ブロックに属する東北6県の各県支部で救護班の準備が整い、順次出動できるという連絡がありました。

——9月6日午前8時40分に先遣隊を3町に送ったと聞きました。

大崎 災害発生時には現地の情報が交錯するため、まずは先遣隊を送って、どう



大崎 政仁さん

いう状況か、何をしたらいいのか、何が不足しているのかなど実状を把握し、必要な活動の確認と、拠点となる現地对策本部の開設に向けて準備を整えます。

平尾 送り込んだ先遣隊は3名で、被災3町で色々うかがう中、地域の診療機能が止まっているというお話があり、24時間態勢の医療救護所の設置を要請されました。地理的に3町を効率よくカバーできることから、厚真町にご協力いただき、午前11時40分に現地災害救護実施対策本部と医療救護所を厚真町総合福祉センターに設置しました。

——現地对策本部の陣容はどのように組まれたのでしょうか？

平尾 現地对策本部には、事務員として道支部から2名、災害医療コーディネーターとして医師1名を置きました。ほぼ同時に道内各地の赤十字病院からも救護班が入



被災者の健康をチェックする日赤の救護班員（日本赤十字社提供）

り、その後、東北各県支部から救護班が入ってきました。赤十字救護班の基本編成は、医師1名、看護師長1名、看護師2名、主事（事務員）2名の計6名です。地震の起こった9月6日には道内赤十字病院から7班が入っています。

大崎 赤十字病院は、全国91病院のうち北

海道に10病院があります。それぞれの病院で救護班を1〜3班編成しており、道内の救護班は17班となっています。道内と他県の応援を含め、多い時には12班が現地に入りました。

今回改めて感じたことは、北海道は離島、だということ。海を隔てているので、陸路では来られない。その分、道外からの応援は時間を要します。北海道と同じ第一ブロックの東北各県支部では、出動態勢を速やかに整えました

が、フェリーなどの移動手段の確保に時間を要しました。一方、東京の本社からは、道支部を支援するスタッフが提携している海上保安庁の飛行機で飛んできました。

平尾 四方を海に囲まれた北海道では、発災から3〜4日は道内の人員で対応できる体制が必要で、その意味でも道内に10の赤十字病院があることの意義は大きかったと思います。

——救護班はどのような活動を？

平尾 災害医療全体を心配するのは北海道の保健医療福祉調整本部で、

その指揮下にDMAT（厚生労働省の災害派遣医療チーム）やJMAT（日本医師会災害医療チーム）、日赤などが協働・分担して避難所を巡回しました。避難所で救護班は簡易的な医療ケアを行います。医師も加わっているので薬の処方も行うことができ、災害救助法の定めにより医療費もかかりません。専門医療機関での治療が必要と思われた場合は、調整本部に情報を伝え、受け入れ先の調整を依頼します。

救護班のもう一つの活動の柱は救護所の運営です。地元の医療を圧迫してはいけませんから、地元が対応できない期間だけ、地元の診療・医療機関の「すき間」を応援するという立ち位置です。今回の場合は、9月6日から20日まで厚真町総合福祉センターに24時間体制の救護所を開設しました。割れたガラスで負った切り傷、避難時に負った捻挫など外傷の患者さんが多く見られたので、縫合処置なども行いました。今回は通常の救急医療セットのほかに冷蔵庫を設置できたので、温度管理の必要な薬剤も用いることができました。このほか、避難所の衛生環境改善のため、ダンボールベッド設置のお手伝いをしたことも今回の



救護所に医療物資を運び込む赤十字ボランティア（日本赤十字社提供）

特徴でした。また、赤十字防災ボランティアは、救援物資の配付に力を発揮しました。

——厚生労働省のDMATと日赤救護班の
関係について教えてください。

平尾 DMATは災害派遣医療チームの略称で、平成7（1995）年の阪神・淡路大震災を契機に設けられた厚生労働省の制

度です。訓練を受けたおもに各地の災害拠点病院に所属する医師、看護師、事務員が登録されます。赤十字病院のスタッフもDMATとして登録されています。一方、日赤の災害救護は国際赤十字の成り立ちに根ざすもので、戦前の組織発足以来の取り組みです。胆振東部地震では、DMATとして応急医療に従事した後、赤十字病院の職員に戻り、赤十字救護班として引き続き活動したスタッフもいました。

大崎 DMATは発災後72時間の緊急医療に従事することを活動の基本としています。災害時にはまずDMATが被災地に入り、負傷者の応急医療や病院支援を行います。病院支援は、被災によって病院スタッフが不足した病院を支えるもので、胆振東部地震では鶴川厚生病院を支援しました。

DMATは長期にわたって活動することが難しいですから、そのあとを私たち赤十字や日本医師会のJMATが引き継ぐ形です。それぞれのコーディネーターが役割分担を調整しました。

——災害救護活動では、このころのケアにも重点を置かれているそうですね。

平尾 胆振東部地震では、看護師3名、事務員1名の4名1班で「このころのケア班」を編成し、発災から4日後の9月10日に現地に入って医療救護班と同時に活動を開始しました。発災から日数が経過することで、避難所生活のストレス、地震に対する恐怖心、その後の生活への不安などが強く表れるようになります。9月20日以降は、医療救護班からこのころのケア班に活動の重点をシフトさせました。

具体的には「積極的な傾聴」といって、じっくりお話をうかがいます。ハンドマッサージなどでリラクセスしていただける環境をつくり、その方に寄り添い、心にかえていることを吐き出してもらう。治療が必要になる前段階で、心の緊張をゆるめってもらうことがおこなった活動です。

大崎 このころのケア班は、日赤で専門的な研修を受けた「このころのケア要員」に登録されている看護師などのチームで、10月12日までの33日間で29班が出ています。対応期間には若干違いがありますが、このころのケア班が的確に活動できるように調整を担う



救援活動の打ち合わせをする日赤救護班（日本赤十字社提供）

調整班も並行して10班ほど活動しました。北海道では精神科医を配属したDPAT（災害派遣精神医療チーム）を派遣していましたが、連携を取って活動を進めました。平尾 こころのケア班の役割としては、専門的治療の前段階、心の健康を悪化させないようにストレスを緩和することです。専

門的治療が必要と思われる方には、DPATへつなぐ活動を行いました。

——被災された住民はもちろんですが、現場や消防など災害対応に当たる方たちのケアも大切です。

大崎 その部分は、まさに私たちが重視したことです。町職員、消防職員など、ご自身が災害に遭われたとしても、自分のことよりも応急対応や復旧活動に携わらなければならぬ方がいます。時間とともに疲れが出てくるそうした方たちにも、リラクゼーションの環境が必要と認識しております。それで各町の町長とお話をして、ケアの場所を作ってもらいました。平尾 皆さん、使命感を持って仕事をされていますので、避難されている住民から見える所ではケアを受けられない。そのため、住民から見えない場所を確保してもらいました。支援者支援と言いますか、被災者でありながら支援者として頑張っている方々の方々のために精神的なケアを行いました。大崎 こうすることで、頑張ろうという気持ちが新たに、良いサービス

を長く続けられることにつながると思います。

——今回の経験から改善点などは見つかりましたか？

平尾 日赤は発足当初から救護を使命として様々な活動をしてきましたが、特徴的な強みを持つ災害救護のチームがたくさん出ていますので、今後は活動を分担して連携・協働することがより大切になってくると思います。

大崎 今回の特徴の一つは、被災3町ではありませんが、合併町を含めると実質5町となり、被災が非常に広範囲だったことです。救護所から遠い地域もあり、救護班が見落とさずに回れたかという反省も含めて、いかに情報を取るかが重要だと再認識しました。あわせて、自然災害が大規模化している印象があります。いかに情報を集約して本部が調整するか、ますます大切になってくると思います。

また、最近の問題として新型コロナウイルスがあり、避難所のあり方や救護活動も変わってきます。そうした課題に対して、どうすべきか対策を講じながら、より充実した救護活動へつなげていきたいと思っています。

